

日本エッセイスト・クラブ

2021 春

NO.72-III

会報



第68回 日本エッセイスト・クラブ賞

受賞作

裁判官も 人である

良心と
組織の
狭間で

Tatsuya Iwase
岩瀬達哉



100人を超える裁判官への取材でわかった苦悩するエリートたちの「素顔」
あなたに人が「裁ける」か？

第68回

日本エッセイスト・クラブ賞
受賞

講談社

裁判官も人である 良心と組織の狭間で

岩瀬達哉

裁判官たちは日々、何を考え、何に苦悩しているのか。100人以上の裁判官に取材したジャーナリストが、彼らの生態を明らかにする。

1700円(税別) 978-4-06-518791-3 講談社

万葉学者、 墓をしまい母を送る

上野 誠

現代万葉研究を大きくリードする学者は、故郷福岡の墓をしまい、老いた母を呼び寄せ、七年のあいだ介護して見送った息子でもあった……。体験と学問を軽妙な筆致で往来し、死について深く考えた、真の「エッセイ」

1400円(税別) 978-4-06-519239-9 講談社

上野
誠

万葉学者、
墓をしまい
母を送る



講
談
社

目次

日本エッセイスト・クラブ

会報

2021 春

題字 阿部 眞之助
表紙 よしだみどり
カット

「エッセー」

おみやげ

献呈詩の周辺

作家からの手紙

七年ぶりに『辞書になった男』の

「酷評」を読んで

死者たちの木霊

記憶という難敵

運転経歴証明書

エッセーとは何か

エッセー募集

会員近況

事務局から

日本エッセイスト・クラブ定款

会員名

岡田恵美子 2

太田 愛人 5

久我なつみ 8

佐々木健一 11

浦田 憲治 15

田中 伸尚 18

原田 國男 22

秋岡 伸彦 25

エッセー募集 28

会員近況 29

事務局から 32

日本エッセイスト・クラブ定款 34

会員名 36

エッセー

おみやげ

岡田 恵美子

(会 員)

イランの新年は日本の春分の日に当るので、私が住んでいた首都テヘランは花の香りで一杯になる。

砂漠のまん中で——と思うかも知れないがそこは「詩とバラの国」どの家にも花壇があり、花屋にはバラやヒヤシンスが溢れている。

私とイランの友人はお招きを受けた先生のお宅へのお土産を選ぶというのだった。

「これが好いと思うけど」「いやー、これでしよ」

私が指さす香り高い小さな水仙の束には目もくれず、友人は大きなチューリップの鉢を指す。

それはひと抱えもありそうな鉢、チューリップが七、八本、それもすでに咲ききって花卉が散りかかっているのだ。

友人に押し切られて私たちは鉢を抱えてタクシーに乗った。

「まーっ、美事な」と先生。そして唄うように「ラーレ、ラーレ（チューリップ）！」というお声が残っているばかりだ。

イラン人はお土産が大好きだ。私たちが心こめて贈る小さなパールの一粒より、ザラッと目立つ大きなもの。

いつかイランの客人がカメラのズームが欲し

いという。カメラ屋に来てもらって品定め——という段取りになった。

「これがいい！」彼は大喜びで即座に大きな物を三つ選んだ。

カメラ屋は心配した。「サイズもあるし、高いモノですよ」

岡田恵美子（おかだ・えみこ）



1932年東京生まれ。テヘラン大学、同大学院博士課程卒。文学博士。東京外国語大学教授、中央大学総合政策学部教授などを歴

任。現在、日本イラン文化交流協会会長。1982年、『イラン人の心』（NHKブックス）で第30回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。著書に『増補復刻版 イラン人の心』（人文書館）、『言葉の国イランと私』（平凡社）、訳書にフェルドウシー『王書（シャー・ナーメ）』古代ペルシャの神話・伝説』（岩波文庫）など多数。

すると彼は手を振った。大丈夫だ、これこれ。お土産は自分の夢、旅の産物なのだ。役にたてば勿論いいが、たたくなくても話が楽しければいいんだよ。まあ旅は自分の見た夢のようなものだ。所詮、お土産は夢の続きなんだよ！

私は一昨年、思いがけない招待をうけてイランで一週間ほどを過ごした。

用事が終り、お土産の算段をするほど楽しい一時はない。Aちゃんにはあれ、Bちゃんには……驚く顔、パツとはじける笑顔、あらっ私にも……と恐縮するしぐさ。

でも今回は手荷物だけと決めていた。着替えと学会で頂いた何冊かの本を詰めると私のリュックは手一杯だった。

街をぶらぶら歩いてみると、ホテルの筋向いにかつこうの豆屋が店を開いている。ピスタチオ、カシウナッツなどが店一杯に積み上げられ香ばしい匂いが広がっていた——小父さんが手招きする。

「あんた旅行か？ ペルシャ語が上手いじゃないか——」

「そうよ、私テヘラン生れだもの——」

こんな軽口を叩きながら物を買うのがイラン流なのだ。

見るとサフランの小びんが並んでいた。サフランの花の雄蕊^{おしべ}を干したモノは、水に放つと黄色い色を発し、独特の香りもあつて、スープ料理や洋食に使われる貴重品なのだ。

そうだ、これにしよう！ 第一掌にのる小箱だもの荷にならないわ。……私はこの小箱を六つとピスタチオの一番小さな袋を包んでもらった。ピスタチオは落花生のような味の香ばしい木の実、この国の名産品だが、殻つきなのでけっこう重い。

翌日、時間通りに運転手がやつて来た。

「先生、荷物はそれだけかい？」

私はパンパンにふくらんだりユックを叩く。そして学会のあらましとお土産のあれこれを話しながら空港へ。すると彼が「ちよつとより途——」と言って車を止めた。

夕刻の便にはゆうに二時間ある。夕べの祈りに備えて方々の寺院から「アザーン」というコ

ーランの呼び声が高く低く聞こえてきた。この呼び声は通常、イスラーム国ならどこでも日の出、正午、日没には聞こえてくる。

彼らはこの呼び声を合図に手足を清め、祈りに備える。水のない処では砂で——と聞いている。あ、イスラームともお別れか、ふと感傷のようなものが湧いてきた。

「じゃ、さよならね、

一週間お世話に……」

と言いかけた時、彼は大きな紙袋をどざりと足許においた。

「先生、これはばくからじゃない。

イランからのお土産だ……」

何を言う暇もなかった。

足許におかれたピスタチオの大袋、空港職員 of 助けを借りながら、もちろん私はその重いピスタチオの袋を持ち帰ったが、

「これはばくからじゃない。イランからのお土産だ」といった青年の言葉は、ずしりと心にこたえた。

エッセー

献呈詩の周辺

多くの献呈本の中で詩集は生涯一冊だけ、阪田寛夫『含羞詩集』である。その中に「いただきます」と題した一篇の詩が入っていた。

― 太田愛人^{あいと}「牧場の「キジ」」による

太田愛人牧師が泊った牧舎の窓に

天からキジが降ってきた

「羊飼の食卓」の著者と知ってかのように／ガラス窓にぶつかって死んだ鳥の砂肝には／新芽と草の種がつまっていた／牧師は夜のうちに羽をむしり臓物をぬき／同郷のキジがすてた命とそのいれものを／骨もモツもひとつ^{あま}剩

太田 愛人

(会 員)

さずみんなで頂くことにした／朝の食卓で詩篇百四篇を読み祈ったあとの「いただきますーす」の声があんまり大きくて／ガラスの破れ目から蒼天に届いた

牧舎に住みつく古猫の証言

この時です、皿のキジが目をさまし骨や臓物をかき集めてたちまち昇天したのは／ほんとですたら

阪田寛夫『含羞詩集』より

この詩を一読して、『オール読物』元編集長鈴木氏は「面白い、傑作だ」と感想をとどけてくれた。彼は盛岡出身の同窓で阪田フアンである。詩の流域は次々に広がっていった。阪田フアンは子供から専門家に及んだのは、その性格からくるユーモアと含羞からである。阪田詩の数々を作曲した中田喜直は「小説家をやめて詩人に徹した方がいい」と私に話したことがある。また「家内に『どうして「サッチャン」を作曲し

太田 愛人（おおた・あいと）



1928年盛岡市生まれ。東京神学大学、大学院卒。長野県、横浜市で日本キリスト教団牧師。現在は引退。著書「羊飼の食卓」（第

28回日本エッセイスト・クラブ賞受賞）「明治キリスト教の流域」「野村胡堂・あらえびすとその時代」「開化の築地 民権の銀座」ほか。

なかったの』と訊かれたことを伝えてくれた。内訳は夫人の名は幸子であることを私が知っていたからだ。作曲者は従兄の大神恩だからしかたがない。

信州の最北端の大町と柏原の教会に山に魅せられて牧師を続けたが、夏が来れば野尻湖畔の国際村が開かれて別荘暮らしの阪田一家とのつきあいが生じた。次女なつめさんが宝塚の花組スターになると仲間同伴でやって来る。作家の父はボーチの片隅で読書に耽っていた。時々家族同伴で教会に来ると礼拝のオルガニストになって讃美歌の伴奏者になる。ありがたい信徒であった。

ある日曜日、詩人に「宮沢賢治が短歌二首も詠んだことがある友人の阿部孝を御存知ですか」と問うと「英国帰りの実力のある先生で高知高校創立いらい尊敬された学者」と教えてくれた。

賢治没後、昭和十年代から宮沢賢治全集が幾度か試みられ、資料探しが盛んになったが、盛岡中学時代の賢治を熟知していた阿部のことは表面に出なかった。高知大学学長を辞して、高知新聞の客員になってから著書『ばら色のバラ』

を出版して、人々に知られるようになる。文中の賢治との交友関係が公けになるに及んで私も読者の一人となった。

エッセイスト・クラブ賞を受けた後で、隠者のような阿部が知られるようになった。彼も花巻出身で盛岡中学に賢治と同じ年に入学して寄宿舎で生活した。卒業時に阿部は金田一京助の弟と主席を争い、一高に揃って入学した。賢治は六六番であった。後年、二人の運命を結ぶ人は少なかったが、賢治との交友は手紙を介して続けられていた。阿部はボロ家に住む賢治を訪問してレコードを聞いて楽しんだ。彼は宮司の子、賢治は質屋の長男、共に悩みが多かった。賢治の『セロ弾きのゴーシュ』執筆時で下手なチェロを聞かされて閉口している。往復書簡も交わされ大切に保管された。賢治全集が編まれると、阿部宛の手紙のゆくえが探索されて阿部に問い合わせると「焼却した」とそっけない返事に探索者を悔しがらせた。もし手紙が出現したら高値がつくと噂され、阿部の挙措にうたれた識者は地団駄を踏んだ。

戦後阿部は東大に招かれたが断わり、高知に

住み続けた。

私の本の装丁は同郷の深沢紅子さんが担当して好評であった。『含羞詩集』の中に「いただきます」と深沢さんへの献呈詩が同居していた。

花言葉 — 深沢紅子氏逝く

野の花を吹きぬける風の中に立つ娘／回顧展の「花野」の前で願って許され／三日後の朝九十歳の女流画家を訪ねた／昔と今の途中がカラット抜けていたのは／火事でぜんぶ焼けたから、と彼女は言った／油絵は焚付（やきつけ）のようなもので、喜んで焼けた／あれほどすっきりしたことは／ありませんね、声の張りまで覚えていたのは／卓上に、刷り上げた勿忘草の絵があったから

その八日後に心筋梗塞の死の記事を見た旅の終りの大事な時を割き与えられな忘れそ

こちらに向かって揺れる藍色の言葉

葬儀の司式を頼まれて講壇から「野の花を見よ」と題した説教中に阪田さんの姿を見つけた。

エッセー

作家からの手紙

父も母も職業作家という奇妙な家に私は育った。筆一本の渡世はサーカスに似て、危険この上ない。

父は若い頃から作家志望だったが、老親を養うためいやいや役所勤めをしていた。太平洋戦争の勃発で応召して広島第二総軍司令部に配属され、原爆に遭遇。街は壊滅したが、父は落下した梁の隙間で奇跡的に命拾いした。

仲間を救いだそうと瓦礫の山をかきわけ、かきわけ、一人も助けられない。

凄惨な体験は父の人生観を変えた。亡くなった仲間の無念がとりついたのかもしれない。復

員すると職につかず、どんなに貧乏しても文筆に賭けた。

同人雑誌を創刊し借金を背負うという手痛い失敗を経て、「週刊朝日」主催の「百万人の小説」で佳作となった。おかげでシナリオライターの仕事を得て、作家デビューを果たし、とんとん拍子だったのは、高度経済成長の波にのったおかげもあるだろう。

七十四才で亡くなるまで、四四五冊の本を上梓した。歴史小説、経済小説、ミステリと多分野を手掛けて付合いが広く、急逝する前夜まで仕事をした書斎には、作家、編集者、企業人ら

久我 なつみ

(会員)

からの手紙や葉書が多数残されていた。辻邦生、城山三郎、五味康祐等々。村上春樹をデビューさせたことで知られる編集者の手紙もあった。段ボール箱に三十年分ぎっしり、ひしめいて、終演後もざわめきがやまぬような熱気を私は感じ、夢中で読みふけた。

三回忌に、滋賀県立図書館の協力をえて回顧

久我なつみ（くが・なつみ）



1954年京都市に生まれる。同志社大学卒業後Y M C Aに英語講師として勤務する。かたわら美術を学ぶ。新制作展入選3回。文筆

に転じて『フェノロサと魔女の町』で第5回蓮如賞、

『日本を愛したティファニー』（いずれも河出書房新社）

で第53回日本エッセイスト・クラブ賞受賞。他に『ア

メリカを変えた日本人』（朝日選書）『文豪と異才たち

井原西鶴から村上春樹まで小説ブームを作った人々』

（河出書房新社本年度出版予定）等。

展を開いた。広いロビーに会場を設営し、父が出演したNHK番組のビデオ上演や写真パネル、原稿等の展示をした。残念だったのは、私がいちばん貴重だと感じた書簡類を紹介できなかったことだ。

「許可がとれない」と、母が強く主張したからだ。無名時代から親しかった高橋和己だけ、たか子夫人にお願いして展示させていたのだ。

若き日の手書きが目を引きたく、京都新聞の記事にしてくれた。やはり書簡類は読者の心に響く、と私は手応えを感じたが、相続人の母に従うほかない。

父の長い作家人生を支えた母にも、苛烈な競争体験があった。日系企業のインドネシア支社に勤め、スラバヤで敗戦、拘束を逃れて赤十字病院で働き、一年後、難民船で帰還――。

波乱を生き残いた猛女ゆえ、同人雑誌の失敗で意気消沈した父を叱咤激励してシナリオライターとしてたたせ、作家としては父より一足早く中央公論社の女流新人賞をとって、直木賞候補になった。

仕事一筋で引っ込み思案の父と違い社交家

で、華やかなパーティーを好んだ。父の没後二十年をへて、九十五才という長寿を全うした母の部屋にはやはり、たくさん書類が残されていた。田地文子、佐多稲子、平林たい子、大庭みな子等々。瀬戸内寂聴からは若き日から出家の知らせまで、毎年のように来信があり、彼女の声が聞こえるようだ。私は決心した。

公開しよう。できないはずがない。

許されないと母は言ったが、長い時が流れ、事情は変わっていた。鬼籍に入られた方が多く、遺族から温かいご理解をいただいたのだ。地元紙にそれぞれの人生と作品を、写真を添えて紹介した。二年間、六十回に渡った連載中、ご子息、お孫さんが丁寧なお便りをくださった。心より、お礼申し上げたい。

どの作品に取り組んでいるときの手紙か調べるのに苦労したが、とりわけ印象深かったのは、辻邦生だ。初期の代表作『安土往還記』執筆直後の葉書に「暮れにはじめて印度に参りました。すごい刺激をうけました」と走り書きがあり、駆け出しの彼の多忙と情熱、世界に向けた眼に感じ入った。

編集者からは長い手紙が多かった。いずれも誠意あふれる内容で、仕事への強い思いに、心を揺さぶられずにいられない。

戦後作家や編集者たちはなぜ、あんなに途方もない情熱を小説に注いだのだろう。無我夢中の彼らの姿がとても眩しく、本に残したいという想いが私の中で強くなっていった。

連載とは違う構成で、『文豪と異才たち 井原西鶴から村上春樹まで小説ブームを作った人々』と題して本にまとめた。戦前の文豪の活躍と戦後の多彩な異才たちによる、この百年の空前の小説ブームがテーマだ。

谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫がいて、新ジャンルのスターや女性作家が活躍し、出版史上空前の高峰に到達した。

次々、すばらしい作品を世に送った主役や脇役や黒衣たちの手紙を、私は長い時間をかけて整理して、ようやく終わった今も、感動の余韻が去らない。書齋は片付き、がらんとしたというのに。

窓を開けると、北山連峰にかかった雲が東へ流れ、青空がのぞいている。

エッセー

七年ぶりに『辞書になった男』の“酷評”を読んで

佐々木 健一

(会 員)

過日、私の携帯電話に見知らぬ番号から着信があった。

「佐々木さんに次の日本エッセイスト・クラブ賞の審査員になっていただきたいのですが……」

日本エッセイスト・クラブ賞、審査委員長の松本仁一さんからの電話だった。思いがけない提案に戸惑い、果たして私のような若輩がそんな大役を引き受けてよいのか逡巡した。熟慮したいと申し上げ、返答を数日待っていた。

思えば私は、七年前に日本エッセイスト・クラブ賞に見出していただいた大恩がある。二〇一四年、当時三六歳の私は初著作『辞書になっ

た男 ケンボー先生と山田先生』（文藝春秋）で第六二回日本エッセイスト・クラブ賞をいただいた。あの時も見知らぬ番号から電話を受けた。「審査委員、満場一致で選ばれました。賞を受けていただけますか？」

文学賞の受賞連絡など当然受けたことがなく、「は、はい……」

と答えるのが精一杯だった。

授賞式当日、客席には作家の出久根達郎さんもおられたと思う。出久根さんは『辞書になった男』刊行直後に朝日新聞の書評で、

「小説よりも面白い。評言はその一言に尽きる」

と身に余る評を書いて下さった。感謝しても
しきれない。それなのに私は、緊張のあまり御
札を申し上げる機会を逸してしまった。大きな
悔いが残っている。

有り難いことに、その後も驚くような知らせ
は続いた。講談社ノンフィクション賞と新潮ド

佐々木健一（ささき・けんいち）



1977年札幌生まれ。2001年NHK
エデュケーションナル入
社。『えん罪弁護士』
『ボクの自学ノート』
などのドキュメンタリ

ー番組を制作し、ギャラクシー賞や放送文化基金賞、
文化庁芸術祭賞を受賞。著書は『辞書になった男』
（文藝春秋／第62回日本エッセイスト・クラブ賞）、
『神は背番号に宿る』（新潮社／ミズノ・スポーツライ
ター賞優秀賞）、『Mr. トルネード』（文藝春秋）、『雪ぐ
人』（NHK出版）、『面白い』のつくりかた』（新潮
新書）など。

キュメント賞にダブルノミネートされたのだ。

だが、現実はそう甘くない。当然のように、
両賞の選からは漏れた。受賞できなかったのは
仕方ないが、愕然としたのは審査委員の選評の
「言葉」を目にした時だった。もし自分が審査委
員になるなら読み直しておくべきと考え、七年
ぶりに『辞書になった男』の評に目をやった。

まずは、講談社ノンフィクション賞の選評か
ら。後藤正治氏は次のように書いていた。

「テーマとして、また語釈にヒントを得て謎を
解いていく方法も新鮮で興味深く読んだが、大
枠のストーリーが既刊本で示されていることが
高評価を躊躇させるものとなった」

続いて、重松清氏。

「参考文献の一つ『明解物語』の存在あってこ
その本書、という感が拭いきれない」

さらに、高村薫氏。

「選考会では、本作の内容の大半が別のタネ本
に負っていることが指摘され、ノンフィクショ
ン作品としての資格が問われた」

そして、立花隆氏も。

『『辞書になった男』はタネ本になった資料の

問題が足をひっぱり（中略）票を集めなかった」

選考会での会話が聞こえてきそうな選評だ。

彼らが一樣に語る『明解物語』（武藤康史編／三省堂）については当然、拙著の中でも触れ、編者の武藤さんには取材や資料提供で協力いただいたことも明記している。だが、辞書の語釈や用例に二人の辞書編纂者（見坊豪紀と山田忠雄）の心情が綴られている可能性を見出したのは、紛れもなく私である。

じてん【時点】「一月九日の時点では、その事実
は判明していなかった」（『新明解』四版）

この用例に書かれた「一月九日」という謎の日付に注目した者はそれまで一人もいなかった。なぜ、彼らは『明解物語』をタネ本と位置づけ、拙著をその二番煎じのように捉えたのか、七年を経ても私は未だ理解できない。ただ、あの時、選考会の中では誰かが発した「タネ本」という「言葉」が支配的で、それに異を唱える者はいなかったということだ。

次に、新潮ドキュメント賞の選評を見直して

脱力してしまった。藤原正彦氏は次の通り。

「国語辞典編纂に携わった二人の国語学者の幼稚とも言える諍いが主題である。学者の実にくだらない諍いを見飽きている私にとってはさほど新味が感じられなかった」

続いて、恩田陸氏も。

「結局は、方向性の異なる人間二人の内輪もめの話なんですよね……どうにも話が小さいのは否めない」

福田和也氏は、次のように書いていた。

「実は個人的に満点をつけたのは、佐々木健一『辞書になった男』であった。選考会では、『学者の痴話喧嘩なんかには興味が無い』といった厳しい声もあったし、『そもそも辞書に編者の個性が出ること自体がおかしい』との意見も出た」
実は、最も腹に据えかねる発言が唯一、拙著を推していただいた福田氏の評に書かれていた、どなたかの次の言葉だった。

「辞書に編者の個性が出ること自体がおかしい」

この見解は明らかに誤りだ。なぜなら、数ある国語辞書の中でも最も規範的・保守的とされる『岩波国語辞典』ですら、辞書に個性が現れ

ることを否定していない。否、そもそも、辞書に個性があるからこそ、規範的・保守的な語釈が存在するのである。

文筆を生業とする者は本来、『言葉』というものに敏感なはずである。また、その本質と真摯に向き合えば、世界中の諍い、組織や個人間での諍いが畢竟、言葉という不自由な伝達手段によって生じることは承知のはずだ。言葉と日々向き合っている辞書編纂者の間でも、それは例外ではない。その証左が、見坊豪紀と山田忠雄の関係なのである。

だから、私はこの二人の物語を、

「幼稚とも言える諍い」「内輪もめ」

などとは断じて捉えられない。選評に書かれた彼らの『言葉』を七年ぶりに目にしたが、自分の受け止めや印象が変わることはなかった。

私の腹は決まった。自分の言葉に責任を持ち、しっかりと審査委員を引き受けよう、と。

私はすぐに携帯電話を握っていた。



エッセー

死者たちの木霊

「死は無駄でないし、死者は依然として私たちに働きかけている」（ブルースト『失われた時を求めて』鈴木道彦訳）

青空に紅梅が映える二月、昨年一〇月に肺腺がんのため八六歳で死去した佐江衆一さんの『野望の屍』（新潮社）が届いた。同書はヒトラと石原莞爾を軸に、ヒトラのベルリン進軍から大日本帝国の壊滅までの激動の世紀をつづる史伝だ。何百万の死者を出した戦争の残酷さを描き、平和への切実な願いが込められている。佐江さんは同書を書くために八五歳でドイツに単独取材し、一年かけて脱稿したが、刊行を前

浦田 憲治

（会 員）

に没した。私は佐江さんから『昭和質店の客』『兄よ、蒼き海に眠れ』『エンディング・パラダイス』の昭和戦争三部作を頂いていたので、同書は佐江さんが命を削って書いた遺書に思えた。私の三〇年近い文化部生活を振り返ると、死を前にして最後の思いを伝えようとされた三人の方の面影が浮かんでくる。

その一人は運輸事務次官や日本通運会長を務め、一九八六年一月に肺がんのため七二歳で死去された広瀬真一さんである。広瀬さんは同年二月に日経文化面の「私の履歴書」に登場予定だった。私は担当記者として前年の秋から杉並

区の広瀬宅や秋葉原の日通本社に通ってお話を伺った。それを二八回分の原稿にまとめ、広瀬さんに目を通して頂いていた。広瀬さんは官僚出身だが、エリート臭さがなく、人間味あふれるお人柄で、ユーモアをまじえて恥や失敗談を平気で話された。病魔に侵されながらも、苦しい表情は一切見せず、声は少しかすれていたも

浦田 憲治（うらた・けんじ）



1949年浦和市（現さいたま市）生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒。日本経済新聞社入社。整理部、地方部、流通経済部を

経て84年から文化部に在籍、文芸を中心に美術や映画を担当。89年から編集委員。2012年退職し、フリーに。著書に『未完の平成文学史』（早川書房）、共著に『美の巨人たち』『日記をのぞく』『テラスで読む「知」の冒険』（いずれも日本経済新聞社）など。

のの理路整然と語られたので聞きやすかった。蜜カラの気風をもち、正々堂々と自然体で生きてきた人らしい曇りのない自伝ができた。しかし、直前に急逝されたことで掲載は見合わせとなり、口惜しく、残念だった。翌年、日通本社から『広瀬真一遺稿集』として刊行されたことが、せめてもの慰めだった。

二人目は二〇〇七年三月に間質性肺炎のため七九歳で死去した城山三郎さんである。同年三月の「私の履歴書」に登場するはずだった。前年の夏、担当者の私は茅ヶ崎の仕事場に城山さんを訪ね、履歴書を執筆する旨の快諾を得た。

「日本はよい方向に向かっていないね。僕は戦争がどんなにかひどいものかを書きたい」と赤ワインを飲みながら元気に語っていた。年が明け、二月中旬に半月一五回分、七〇枚の原稿が送られてきた。最終調整のために月末に都内のホテルで城山さんと会う手はずだった。ところがその直後、家族から緊急入院されたとの報が入り、面会謝絶となり、やむなく掲載は見送られた。

頂いた原稿は素晴らしかった。「一身を国に捧

げよう」と、一七歳で海軍特別幹部練習生に志願入隊した城山さんが見た海軍は、夢に描いていた「大義の世界」とは大違い。腐敗し、墮落していた。「これほど非人間的というか、非常識な訓練や生活を強制していたのは、おそらく世界歴史にもその例が無いであろう」と声高に告発していた。過酷で不合理な軍隊と戦争の恐ろしさをつづり、もう二度とこのような悲惨な戦争を起こしてはいけないという強固な執念で貫かれていた。

城山さんの原稿は、残念ながら日経では掲載できなかったが、遺族にお返ししたあとで半年後に文芸春秋から刊行された城山さんの随想集『嬉しうて、そして…』の巻頭に収められた。私は多少安堵した。

三人目は、一九八九年一月に肝硬変のため六六歳で死去した隆慶一郎さんである。隆さんは日経の夕刊に連載小説『花と火の帝』を一年半ほど執筆されたが、死去されたために、この小説は中断し未完に終わった。

隆さんはもともと東大仏文出身の、小林秀雄を師と仰ぐ文学青年だったが、長らくシナリオ

ライターとして糧を得たことで、小説家としてのデビューは還暦を過ぎてからと遅かった。このためであろう。一時は新聞三紙と月刊誌や週刊誌に同時に七つもの連載を抱え、時代小説を塗りかえる超人的でエネルギーな執筆活動を展開した。

しかし平成に入ってから体の不調を訴えるようになり、五月の連休明けに入院した。隆さんはそれでも病院で日経の連載だけは書き続けた。担当者の私は、毎日病院に通って原稿を受け取った。病状はどんどん悪化していくようだった。「早く連載を終えて治療に専念したら」と家族が勧めたものの「馬鹿者！ 小説がそんなに簡単に終えられるものか」と一喝された。最後までペンを手放そうとはしなかった。

「浦田ニアッタコト判ラズ。休サイキマル。ムネン」。死後に残された隆さんの手帳には、病床で意識を失って小説を執筆できなかった断腸の思いがつづられていた。

「虎は死して皮を留め、人は死して名を残す」という。こうした死者の思いや言葉は、今もなお木霊となつてはね返ってくる。

エッセー

記憶という難敵

田中 伸尚

(会 員)

去年の秋口だった。「あれは、私の心臓を驚づかみにして走らせた広告でした」遙か遠くに去った若き日の一コマを語る、卒寿を超えた彼の声はアクリル板にさえぎられたせいもあってか、くぐもって聞こえた。

編集者のレジェンドと語り伝えられている原田奈翁雄さんの取材をしていた折りだった。今は「主権者革命」を唱える原田さんだが、一八歳だった敗戦時には敗北を受け入れず、一人でも戦うと決意を固めていた皇国少年だった。彼は『朝日新聞』に載ったその広告を見て、熱い心を奮い立たせて皇居前へ飛んで行った。一九

四五年一二月一日の朝である。同じ広告を見て駆けつけた少年らと「殉皇菊水党」をつくり、テロリストへの道を駆けていく。マッカーサーと共産党幹部の徳田球一を殺し、天皇を救い出そうと。

「その日の新聞の切り抜きは持っていません。メモ？ 取っていませんね。広告文はあやふやですが、朝日新聞だったのは確かです」けれど原田さんが一九九七年に出した『死ぬことしか知らなかったボクたち』には、その広告全文が紹介されている。

「憂国熱血の青年志士よ／来りて絶叫せよ／

十二月一日午前十時 宮城前広場／勤皇青年同盟」なるほど皇国少年の血を沸き立たせるには十分な檄文広告である。

「実は、朝日新聞が戦後五〇年の連載企画で私らのことを取り上げ、広告の全文を紹介してい

田中 伸尚（たなか・のぶまさ）



ノンフィクション作家

家。『ドキュメント憲

法を獲得する人びと』

（岩波書店）で第8回平

和・協同ジャーナリス

ト基金賞。『大逆事件

死と生の群像』（後、岩波現代文庫）で第59回日本エッ

セイスト・クラブ賞。『飾らず、偽らず、欺かず 菅野

須賀子と伊藤野枝』『抵抗のモダンガール 作曲家・吉

田孝子』『一粒の麦死して 弁護士森長英三郎の大逆事

件』（いずれも岩波書店）、『靖国の戦後史』（岩波新書）、

『ドキュメント昭和天皇』全8巻（緑風出版）、『これに

増す悲しきことの何かあらん』（七ツ森書館）、『不服従

の肖像』（樹花舎）など多数。

たんです。皇居へ行った日もその記事で知ったんです」

原田さんは九五年四月四日付けの『朝日』で、テロリストへの道を用意した広告と半世紀後に「再会」したのだった。

『朝日』の連載には残念なことに、広告の掲載日がなかった。日々激しく動いていた敗戦直後だから、このような広告が何時掲載されたかは時代を掴むには欠かせない。

そのころの主要な新聞は、ほとんどが裏表の二頁しかない。広告もとても少ない。一〇月半ば過ぎには、両面の最下段に本や雑誌の発売広告、芝居の公演などの案内広告、工員や英文タイピスト募集などに雑じって「進駐軍要員緊急募集」といった占領期らしい広告も目につき、量も増えてくるが、広告に溺れそうな今の新聞とは違う。

私は、四五年の『朝日』の複製版を引っ張り出して、大きなルーペを片手に新聞をめくっていった。原田少年を走らせた広告の掲載月は一月の後半だろうと当たりをつけて。裏表の新聞だからすぐ見つかると思ったが、そうはいか

なかった。戦後すぐの新聞は活字が潰れ、印刷も悪く読みづらい。見落としがあるかもしれないと、何度か見直したが発見できなかった。一月だけでなく一〇月まで遡ったがダメだった。

ここにきて私は原田さんの記憶を疑った。『朝日』に間違いはないでしょうか。「家では昔から朝日しか取っていません」原田さんの口調はきっぱりとしていた。『朝日』の連載記事には掲載紙名は書かれていなかったが、読者は『朝日』だと疑わずに読んだにちがいない。私もそうだった。他紙なら新聞名が書かれているだろうから。

なんだか意地みたいになったが、やはり確かめたかった。現物の広告を目にして、読んでみたい。そうでないと原田さんを書けないような気になってしまった。

原田さんの体験にもとづく記憶は、『朝日』の広告を見て皇居前に駆けつけたことだけである。その日が一月一日だと原田さんが知ったのは、五〇年後の『朝日』に教えられたのだから。

そのころたまたま私は、多くの冤罪事件にかかわって被疑者とされた人たちの供述調書、裁判での証言記録の真偽などを分析している心理

学者の浜田寿美男さんの『自白はつくられる』（ミネルヴァ書房）を読んでいた。浜田さんは人の記憶が出来上っていくプロセスなどを供述心理学の視角から興味深く語っていて、ドストエフスキーの『罪と罰』に登場する予審判事のポルフィリーを想ったほどだった。

記憶というのは、過去の体験のインデックスのようなもので、穴だらけで、後から入ってくる情報や記録によって埋められていくことがほとんど——浜田さんはそんなふうに書いていて、私は思わず膝を打った。

居住地の図書館のレファレンス担当職員から、念のためにと勧められて『毎日新聞』のマイクロフィルムを一九四五年一月一日から追っていった。なかなか見つからず諦めかけたところ、最後の三〇日付けの二面に潰れたような文字で「憂国熱血……」の広告が目飛び込んできた。『朝日』の戦後五〇年の連載が紹介したとおりの檄文で、四行の分がち書きだった。私はふーっと息を吐いて、レファレンスの職員に頭を下げた。

原田さんの穴だらけの記憶に、半世紀後の『朝

日』の記事がするりと滑り込み、『毎日』が『朝日』に入れ替わって、それが自身の記憶になっ
てしまった――。

「危うくフェイクの物語と化してしまうところでした」原田さんは申し訳なさそうに伝えてきたが、原田さんのせいではない。ノンフィクションは語りの記憶との闘いだから。記憶はしかし、難敵である。

* * *

原田少年がその後どうやってテロリストから脱したか。その物語は近刊の『憲法を生きる人びと』（緑風出版）に記しました。



運転経歴証明書

原田 國男

(会 員)

人生振り返ってみて、こうしていれば良かったという繰り言がいろいろある。その一つが、自動車の運転になじまなかったことである。運転免許を取ったのは、二〇〇〇年(平成十二年)のことである。五十五歳であった。こんな年で初めて運転免許を取得する人はいないであろう。私の若いころは、今日ほど、運転免許を持っていることが一般的ではなかった。それに、裁判官という私の仕事は、不可抗力の事故でも結果が重大であれば、辞職しなければならなかった。そこで、当時は、同期でも車の運転をする者は極めて少なかった。それに、母親からは、

あなたは、車の運転に向いていないから絶対にしないようにと言われ、兄弟からもやめたほうがいいと言われ、家内からも絶対ダメよと言われる有様だった。自分では、何故皆そうまで言い切るのか、理解できなかったが、仮免で歩道を走ったことで自覚した。これでは、おそらく認知症になる前に事故を起こして、職を辞することになっていたであろう。今は、免許を持ち、運転をする裁判官は当たり前になった。

それでは、何故、そんな年で取る気になったかという、当時、地裁所長をしており、時間的に余裕があった上、教習所が所長官舎の近く

にあったからである。それに、長く刑事裁判をしていると、免許もないのに、交通事故を裁いているのが、なんとも、被告人に申し訳ないと思うようになったこともある。被告人もまさか裁判官が無免許とは思ひもしないであろう。当時でも、国民の十人のうち、八人は、免許を持っていたから、無免許運転の罪で裁く法廷には、無免許の被告人と無免許の裁判官の二人がたままそろっていることになり、これは笑えない

原田 國男（はらだ・くにお）



1945年鎌倉市生まれ。67年東京大学法学部卒。博士（法学、慶應義塾大学）。69年に裁判官任官のち、長年にわたり刑事裁判に

携わり、2010年東京高等裁判所部総括判事を定年退官。現在弁護士（第一東京弁護士会所属）。著書に『刑事裁判の非情と人情』（第65回日本エッセイスト・クラブ賞受賞・岩波書店）ほか。

話だ。免許ぐらいは、若いうちにとっておけばよかったと悔やむ日々であった。

そこで、一念発起して教習所の門をくぐったのであるが、それはそれでいろいろ悩ましいことでもあった。地方裁判所の所長が仮免で落ちたそれだけでもニュースになりかねないので、事務局にも内緒で夕方そそくさと帰宅した。あとで聞くと、事務局長が不審に思っていたという。学生のとき、刑法の大家である団藤重光先生が法規の試験で落ちたといううわさがまことしやかにささやかれた。真偽は不明であるが、先生は、高齢になるまで運転をされており、技量に問題はないが、法規の試験で例えば、常に車間距離を守らなければならないという出題に、緊急避難の場合は、違法性を欠くので×としたのではというのである。これは、学生特有の親愛の情からのからかいであろう。

教習所では、若者らから、同情され、いろいろ親切にしてもらった。彼らや彼女らは、こんなおじいさんになって教習所にくるのは、何か事故でも起こして免許を取り消された気の毒な年寄りだと思ったのであろう。茶髪の兄ちゃん

が学科試験で一番に答案を提出していたので、試験は最後まで頑張るものだ、出来ないヤツだと思っていたら、その成績も抜群で、人工呼吸の実技では、とても親切にしてくれた。人は、見かけによらないものだと感じた。

教官から、ミラーを合わせてと言われ、意味が分からず、助手席の教官の顔に合わせたら、啞然としていた。これだけでも、不合格になっても不思議ではない。免許こそ無事取れたが、案の定ペイパードライバーになった。苦勞して取った免許も三年前に返納した。

認知症の試験に合格する自信がないのと、持っていて身分証明の意味しかないからである。もつとも、代わりに交付された運転経歴証明書は、写真付きなので大変重宝している。

返納の日、警察官からその時点で無免許になったのだから、帰りに乗って帰らないように何度も注意された。免許返納に車で来て、返納して車で帰るボケ老人もいるのであろう。

運転できれば、よかったと思うことはしばしばであった。アメリカに半年行っていたときもそうだが、できなければできないで親切に乗せ

てくれる人がいて、不自由ということにはなかった。アメリカ人は、およそ自動車を運転できない人がいるとは思ってもいないから、私がきっぱりと運転はしないという、そうか運転手がいるのかと誤解し、尊敬してくれる。

アメリカで車に乗せてもらうとき、後部座席に座ったら、叱られた。私を運転手扱いにするのかという訳だ。日本人の風習とはだいぶ違う。

そこで、思い出すアメリカ映画がある。『ドライビング・MIS・デイズ』（1990年）と『グリーンブック』（2018年）である。いずれも、お抱え運転手とその雇い主とを描いている。前者は、黒人が運転手で白人が雇い主であり、後者は、その逆である。いずれも、人種差別が濃厚に残るアメリカ南部を舞台にしている。前者では、最後にたどり着いたほのぼのとした二人の人間関係が、後者では、黒人天才ピアニストに対する舞台外でのすさまじい人種差別が印象に残る。アメリカでも運転手を抱えているのは、一つのステータスの象徴のようだ。いずれの映画でも、当然ながら、雇い主は後部座席に座っていた。

エッセー

エッセーとは何か

秋岡 伸彦

(専務理事)

会の名称をどうするか。設立発起人たちであれこれ議論して、当初「評論家クラブ」「随筆家協会」などが候補になったらしい。

以下、失礼ながら敬称略で記すと、会長に就く馬場恒吾、理事長になる阿部眞之助はじめ発起人には、政治や社会問題など硬軟さまざまな分野の評論家、文筆家が名を連ねていたから、名称はそのどちらでも不思議はなかった。

それに異を唱え、「日本エッセイスト・クラブ」と提案、そのまま了承されて、名付け親になったのはフランス文学の辰野隆だった。

かくて、1951年（昭和26）6月、クラブ

は発足した。当初の会員は約90人。今年は70年の節目となる。

ところで、しかし、エッセーとは何か。エッセイストとは何者か。正面切って問われると、わかったようでわからない。昨年のクラブ賞審査の選考会議でも、大いに議論になった。

クラブ設立の翌52年に創設されたクラブ賞は、その対象を「文芸作品等創作を除く一切の評論、随筆等」としている。現在の審査基準は「随想、評論、ノンフィクション、伝記、研究、ドキュメント、旅行記など」と、さらに詳しいのクラブ賞に関しては、それで定着しているの

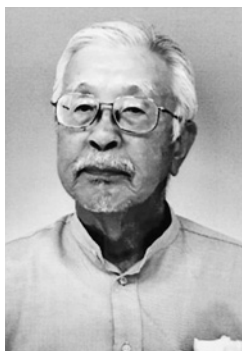
だろうが、エッセーそのものの定義としては、広すぎるように思える。

実は、この種の議論は、クラブ創設当初から始まっていたようだ。

クラブ室には昔の会報が残る。当初は概ね年一回発行だった。粗末なざら紙の、だいふ赤茶けたそれをめくると、毎号のようにどなたかがエッセー論議に参じている。

「私はエッセーともつかず評論ともつかないものを書いている」と、当惑気味なのは青野季吉である。「エッセイストとやら呼ばれる大それた了簡など、ゆめ持ち合わせていない」と、池

秋岡 伸彦（あきおか のぶひこ）



1938年東京生まれ。読売新聞社会部記者、論説委員。コラム「編集手帳」執筆。東京農大参与・客員教授など。著書に『読売コラ

ムニストの13年』『ドキュメント榎本武揚』など。

田潔が見えを切れれば、古谷綱武は「カタカナの肩書は、なかなかキュウクツなもの」と、愚痴っている。

第2回クラブ賞に輝いた秋山ちえ子は、受賞挨拶で実家の母上について語った。

本人より二倍も三倍も大喜びの母は、だれかなく話したいらしい。「でも、なんの賞か聞かれて、いつも困ってしまうから、紙に説明を書いておいて頂戴ですって」

それに答えたわけではなからうが、青野は稿を改めて「エッセイとはどんな性格の文章か」と、正面から取り組んでいる。

まず随筆について、「気儘な発想の気儘な表現の形式で主張や論証といったものは必ずしも重要な要素ではない」と説く。それに比べて、エッセイは「主張的随筆、または随筆的な主張という風に解している」と。

辰野がクラブ名を考える際、モンテーニュの『エッセー』(Les Essais)が頭にあったかもしれない。自身は、これを「随想録」あるいは単に「論集」と紹介している。

フランス通の松尾邦之助は、この書物にも触

れながら、西洋のエッセーは「多分に随筆風の論評である」と解説したうえで、「日本でいうエッセーは、いわゆる随筆の意味がより多く含まれているような気がする」。

この辺が、エッセーという言葉をめぐるモヤモヤ感を表しているのではないか。

挙句の果てにというべきか、「いま考えると、エッセイスト・クラブと名を付けたのが、失敗だったようだ」と、創立7周年の会報（58年発行）に記しているのは、なんと理事長の阿部自身である。

「そのためどれほど世間の通りを悪くしているかわからないのである。電話などでも、この名を呼んで一度で通用したためしがない」

そう嘆いてみせてから、「とにかく自分でもよくわからない名をつけて、平気でいるあたり、やはりこのクラブの性格でもあるようである。

性格のアイマイ性を言い現わした点では適当だったともいえそうである」と。

かなり刺激的だが、クラブ内で、これが「問題発言」視された形跡は、ない。なにせ、クラブ名が発音しにくいのはその通りだ。

森田たまは、よそで「エッセンス・クラブ」と言われたという話を披露した。大宅壮一は、「似非（えせ）イスト」と自嘲気味（？）な造語でしゃれのめした。他にも、「一斉スト」やら「S（エスエス）ト」やら、声に出してみると、なるほど合点する。

そんなエッセー談義もクラブ設立10年を経て、会報上ではだいぶ落ち着いてくる。

当初、「了簡」などという言葉を持ち出した池田は、新たに良質なエッセーの条件として「作者の人柄、持ち味、品位」を挙げた。

そもそもクラブ賞創設を発案した大宅も斜に構えてばかりはいられない。「エッセーは長い人生経験に基づいて、いきり立つことなく、落ち着いてゆっくりした気持ちでなければ書けない」と答えている。

それぞれ心に響くが、ただしエッセーそのもののアイマイさは変わらない。多分、阿部が言うように、それでいいのかもしれない。

それにしても、と思う。もし辰野の提案がな いままに、会が「評論家クラブ」とでも名付けられていたら、今、どうなっていただろう。

エッセーを募集します 会報「冬号」(電子版)に掲載

今年も会員の皆さまのエッセーを募ります。クラブ創設60周年記念で募集して以来、11年連続11回目の企画です。応募作品は、会報「冬号」(電子版)に掲載されます。締め切りは9月末です。奮ってご応募ください。

冬号が電子版に模様替えて、3年目になります。会報を広く社会に発信することで、クラブの認知度、存在感を高め、若い世代にもアピールするのが狙いです。会報発行にかかわる経費の節減にもなります。応募エッセーのテーマは自由。要領は下記の通りです。できるだけ多くの会員の作品を紹介したいと存じます。とりわけ近年、クラブに入会された方々には、自己紹介、近況報

告の意味合いも兼ねて、ぜひご応募ください。ようお勧めいたします。一方で、多くの会員の参加を歓迎する趣旨から、2年(2回)連続の応募は遠慮いただいております。一昨年(前々回)応募された方にはなんの制約もありません。

応募要領

- ・ 本文は1600字。
 - ・ 200字以内の略歴を添付してください。
 - ・ できるだけメール添付でお願いします。
 - ・ 応募原稿は原則として返却いたしません。
- ※詳しくはクラブ事務局まで。

(理事会)

クラブのホームページが
あたらしく生まれ変わりました

日本エッセイスト・クラブのホームページが、あたらしく生まれ変わりました。トップページに大きな写真掲載するなどして大幅に改編し、見た目にもあたらしくする一方、クラブ賞のページを充実させるとともに、会員のエッセーをさらに掲載しやすくすることを目標にしています。

パソコン画面だけでなく、スマホでもホームページを読むことが出来るようになりました。電子版会報も、発行と同時にpdfで全文をご覧いただけるようにするほか、過去の会報についてもこれまでと同じサイト(<http://essayistclub.jp/>)に順次掲載していく予定です。



へクラブ賞候補作推薦ハガキより

年明けに8度を超す高熱、食欲不振などに見舞われた。耳に痛みも。

もしやと思いPCR検査を受け「陰性」でした。念のため耳鼻咽喉科へ行くと「中耳炎」と判明。点耳薬などで全快しました。(栗生 將信)

コロナの為どこにも出かけられず、姉の提案で6人の姉妹・弟で自分史を書いております。お互い見せ合うことを楽しみに。(岡田恵美子)

コロナ禍がさっぱり収まらない毎日ですが、相変わらず、次の三つの事は続いています。①毎朝10分間TV体操②毎朝英字紙「The Japan News」のクロスワードパズルを解くこと③週一回フラダンスのレッスンに通うこと。(深尾 凱子)

今年5月1日発売予定の「自伝」(岩波書店)の執筆で、一日中パソコンに向かっています。日経新聞の「私の履歴書」にひきつづいて、書くことのみの生活です。昭和一桁生れの日本女性が、好奇心と無謀な行動で世界に何を見たか。小さな一つの歴史を読んでいただきたいと希っております。(岸 恵子)



「農民文学」の編集長を務めています。326号(2021年冬号)では「農民文学の詩人たち」の特集を組みました。農民詩史をたどりながら、これからも「農」の変化と表現する心を探っていききたいと思っています。(三島 利徳)

数えて91歳になったことし1月、歩行のさい使っていた杖を手離し、自力で歩くようにした。最初は心細かったが、杖がないと、かえって一歩一歩踏みしめて歩くようになった。からだが自由に動くようになった。91歳になってからの自立である。(山本恵外里)

「文学の国いわて」らしく、会員をふやしたいと思っています。(野中 康行)

東京の高校文化祭で「あちこちのすずさん」を取上げたテレビ番組でやっていて、そのとき全国の中の4校がオンライントークをしています。その一つが私の母校。アニメ映画を見た後、私の体験を一気に書き上げ、本「思い出ポロポロ」(文芸社刊)を出していました。オンライントークの4校「あちこち」でなく、同じ時、同じ場所、同じ体験をした「すずさんそのもの」だと本を添え、先生と生徒さんにお手紙をし、お返事を貰いました。2021年少し明るい気配がします。(岡 佳津子)

「ついのすみ家」か、福島県浜通り地方で介護生活を送っています。当面は元気にやっています。パソコン不調のため不便。コロナ禍がなければ早速修理するところですが、それもままなりません。そのためにも、ワクチンの早期普及で集団免疫獲得、ウイルス撃退を望んでいます。

(吉原 賢二)

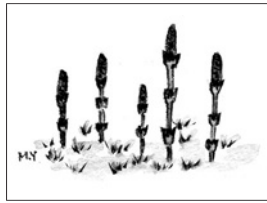
出歩きがおっくうになりました。ころ、コロナ禍で連日外出自粛が叫ばれ、調子を合わせていたら、たちまち運動不足です。介護保険がらみでフレイル寸前の高齢者向け体操教室をすすめられ、通っています。ダンス、ゴルフ、水泳、ランニング etc. に無関心だったせいで、初歩的な教室は面白く、男女のご同輩に親近感をもち、愉しく観察しています。もちろん、自分がその一人です。まだ半年の初心者ですが。

(藤原 房子)

卒寿が目前に迫った。この際恥を忍んで申し上げると、本会員、稲畑汀子氏のご主人故順三氏と私は同学部、同年次であった。バックスとし

て彼の華麗なプレーは西京極でよく拝見した。あの頃は京大のラグビーは強かった。70年近くたった今、私は俳句の面白さに目覚めている。森羅万象常に観察の毎日、近作を二句。どの顔もマスク美人や半夏生初場所やラガーに相撲取らせたり

(齋藤 健)



70歳。40数年続いた某大学での非常勤講師も定年を迎えた。130名余りの受講生と、この1年間、全く会うことがなかった。オンライン授業で。

(秋山 秀二)

この二月に白寿の母が逝き、母との対話がより深まっていくような日です。

(小曾戸明子)

石神井公園のボート池のかいばり作業を観ました。池を干して魚を獲っていました。廻りの岸辺護岸工事をやり、池の環境をよみ返らせようとしています。

(坂本 弘道)

コロナの影響を受け、カルチャーセンターのエッセイ講座は閉講となりましたが、オンラインによる指導を細々と続けています。こういう時期にも勉強を忘れない生徒さんの熱意には頭が下がります。

(内藤 洋子)

初雪の富士拌まんと丘に立つ月一回の句会に参加するほか、ブログでエッセイを書いていきます。

(砂原 和雄)

日々、地元の生涯学習センターの講義に追われています。二、三月は、ピアノストと組んだベートーヴェンの講堂講座がほぼ満員になる人気です。

(今野 耕作)

我が十七、八歳での五つの世界がまとめ中です。①勤労動員で機関砲の弾体製造②海軍経理学校入校③敗戦後、金沢の第四高等学校入学④金

沢市内の尼寺での下宿生活⑤能登半島の穴水での炭坑アルバイトです。

健康対策として、近くのリハビリ温泉センターで、いろいろな機器を使って身体を柔軟にしています。

（倉部 行雄）

2月に救急車で病院に運ばれ、冠動脈にステントを6本入れてもらい助かりました。毎年救急車のお世話になっていきます。税金はわずかしかなめないのに申訳ないことです。

（中村 政雄）

拙著の中公文庫「日本航空一期生」が3/20（土）TV朝日系「エアガール」となります。広瀬すず主演で、戦後、日本で初めて民間航空会社を立ちあげた人々の汗と涙と笑いを描きます。

（中丸 美繪）

この数年来、明治末から大正にかけての若き文学者たちの熱き交流を、その書簡を通して探っています。やっと全貌が見える地点まで辿り着きました。何とか世に聞きたいの思いが募りますが、この期に及んで、視点を定める難しさに直面しています。

す。青年たちの決して色あせない文面は、過剰な程にほとばしり迫りますが、読み解く側の変遷には否応ないものがあります。速度を増し（!!）過ぎ去る歳月をむんずと掴みたくなる毎日です。

（海老沢小百合）

4月下旬に新潮文庫より「雪ぐ人」「冤罪弁護士」今村核の挑戦」が刊行されます。

（佐々木健二）

昨年まで、当日本エッセイスト・クラブ常務理事を務めておられた後藤多聞さんの遺作となった『漢とは何か、中華とは何か』（人文書館）の中国語繁体字版（台湾・八旗文化社より刊行予定）の後方支援中です。

（道川 文夫）

私がプロデュースしている（株）バイインターナショナルの名著ビジュアルブックシリーズの谷崎潤一郎「陰翳礼賛」が7刷、岡倉天心の「茶の本」が2刷となりました。また、「茶の本」は今春英語版で欧米発売となりましたが、もともと天心が英語で書いた本なので、妙な気分ではありません。

（谷村 鯛夢）

デジタルの世になる前に去りたし 二十世紀の人間われなれば

（村尾 清一）

会員近況投稿のお願い

会員近況欄への投稿を歓迎いたします。字数は80字程度。エッセーおよび近況欄へのご感想なども事務局までお寄せください。お待ちしております。

ご寄贈と自著紹介のお願い

刊行から概ね1年以内を目安に、ご著書の紹介を事務局あてに随時、郵送、FAX、メール等でご送稿ください。紹介の本文は著者名、著書名は別にして、250字程度。また本文とは別に出版社・価格を付記願います。

事務局から

新会員の紹介

小泉 清（こいずみ・きよし）氏



ライター・エディター。読売新聞大阪本社科学部などを経て、退職後、ホ

ームページの執筆、編集など。著書に『うつりゆく時をたずねて』『人が歩いて道になる』。大阪府在住。

軽部 謙介（かるべ・けんすけ）氏



帝京大学教授。時事通信社編集局次長、解説委員長を歴任。著書に『検

証バブル失政』『官僚たちのアベノミクス』『ドキュメント 強権の経済政策』など。東京都在住。

新会員推薦のお願い

会員一名の推薦でも審査

当クラブの新会員をご推薦ください。クラブの一層の活性化をはかるべく、ぜひ新しい仲間たちを迎えたいと存じます。お知らせなどで、会員にふさわしい方をご紹介くださるよう、皆さまのご協力をお願いします。

クラブ定款第7条にありますように、正会員となるには、現在の正会員2名以上の推薦を得て、理事会の承認を求めることになっています。

この「2名以上の推薦」という原則は変わりませんが、会員1名の推薦でも、理事会に申請していただければ、審査の対象とします。理事会推薦によって、規約の要件は十分に満たすことができます。

エッセイストの意味合いについては、狭義の随筆や随想だけにとらわれず、評論、ノンフィクションなど幅広い分野を対象にしています。著

書や新聞・雑誌などのお仕事を参考に、クラブの趣旨に即して、理事会で審査します。

4月現在の正会員は217名です。入会推薦の用紙などはクラブ事務局に用意していますが、新型コロナウイルスの影響で在宅勤務などもありますので、なるべく郵便かメールでご連絡ください。

なお、毎年のクラブ賞審査で、原則として正会員の作品は対象外ですが、入会の翌年から5年以内に発表した作品は対象になりますので、申し添えます。（理事会）

会員からの寄贈著書

古川治次氏著『俳句と電報と』
鍋島高明氏著『著名人の投資熱 エピソードでつづる84人』

大塚義治氏著『文庫彩時記 三集・本棚の漫歩計』

関千枝子・中山士朗氏著『続 ヒロシマ対話随想』

（11月中旬から3月下旬まで）

特別維持会費ご寄付のお礼

2月末までに、次の会員からご寄付をいただきました。ご芳志のほど、心からお礼申し上げます。

(順不同・敬称略)

畑 正憲 春原 昭彦
桃井 恒和 戸田 桂太
高島 肇久 古川 洽次
岡田恵美子

健康保険のご案内(2021年度)

当クラブは「文芸美術国民健康保険組合」に加盟しています。加入資格は「当クラブ会員で、文芸、美術および著作活動に従事している方とその家族」です。保険料は組合員の収入の多寡にかかわらず均等です。本年度の保険料は次の通りです。

本人 月額 2万1100円
(内訳・医療保険分1万6400円、

第69回日本エッセイスト・クラブ賞の審査は3月中旬から始まりました。同クラブ賞は、1952年(昭和27年)に創設されて以

第69回クラブ賞

6月1日に受賞作発表

来、今年で69回目を迎えます。クラブ会員および出版社から推薦された作品を対象に、3月から5回の審査をすすめます。

受賞作が決まる最終審査委員会は6月1日(火)を予定、翌2日(水)の各新聞朝刊に掲載されます。

なお、クラブ賞贈呈式は6月28日

(月)、日本記者クラブ会場で、午後3時からの総会に引き続き、3時半から開催される予定です。

後期高齢者支援金分4700円)
家族(1人) 1万1600円

(内訳・医療保険分6900円、後期高齢者支援金分4700円)

介護保険料(満40〜64歳まで)

本人・家族共(1人) 5200円

医療費の自己負担は本人・家族共三割、70〜74歳の方は一割から三割です。なお、75歳以上の後期高齢者の方は加入できません。

詳細は、文芸美術国民健康保険組合(031580713551)の加入担当へお問い合わせください。

2020年度理事会報告

第2回理事会(21年3月30日)

- ・ 会員の現況報告
- ・ 2021年度予算案について
- ・ 新入会員の承認
- ・ クラブ賞審査委員会について
- ・ クラブ・ホームページの改革について

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

(抜粋)

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目指すとし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」

という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。
(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならない。

第4章 役員等

(員数)

第20条

当法人に次の役員を置く。

(1) 理事 15名以上25名以内

(2) 監事 2名以上

2

理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によって、理事の中から定める。

3

会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章 理事会

(権限)

第28条

理事会は、次の職務を行う。

(1) 当法人の業務執行の決定

(2) 理事の職務の執行の監督

(3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

第6章 計算(略)

第7章 清算(略)

第8章 附則(略)

役員名簿

会長	遠藤利男				
理事長	(空席)				
専務理事	秋岡伸彦				
常務理事	栗田 亘	原田 國男			よしだみどり
理事	秋山 秀一	梅津時比古	高村 壽一		
	中丸 美繪	深尾 凱子	藤原 作弥		
	藤原 房子	降幡 賢一	堀尾眞紀子		
	松田 宣子	森永 公紀	森脇 逸男		
監事	大高 英昭	今野 耕作			
事務局長(兼)	降幡 賢一				
名誉会長	村尾 清一				

* * *

会 員 名

(2021年 4月1日現在 285名)

五十音順

あ行

阿川 佐和子	阿部 菜穂子	青木 賢児	秋尾 沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
足立 則夫	有馬 真喜子	五十嵐 佳子	井口 隆史	池内 紀昭
池谷 薫	伊野 啓三郎	飯塚 恆雄	飯塚 浩彦	石原 美光
市川 桃子	市田 隆文	稲畑 汀子	猪熊 建夫	岩瀬 達哉
上田 篤	上野 創	上野 誠	臼井 和恵	鷲飼 哲夫
内池 正名	内田 洋子	梅津 時比古	浦田 憲治	海老沢 小百合
榎本 好宏	遠藤 利男	小川 津根子	小倉 董子	小澤 秀雄
小塩 節	小曾 戸明子	尾崎 左永子	尾崎 俊介	及川 直志
大井 玄	大塚 義治	大岩 孝平	大城 浩詩	大空 博
大平 常元	大高 英昭	大谷 克弥	大槻 茂	大場 司
大村 智	大宅 映子	太田 愛人	岡 佳津子	岡島 成行
岡田 恵美子	岡田 直敏	岡本 厚	奥山 俊宏	

か行

加固 康二	加藤 恭子	加藤 貞仁	柏 澄子	勝方 信一
金森 敦子	金子 光美	亀田 泰武	軽部 謙介	河合 弘之
川田 志明	川良 浩和	菅野 光公	北原 歌子	城山 邦紀
儀同 保	菊澤 研一	岸 恵子	岸本 康	北野 栄三
北村 行孝	久我 なつみ	久谷 與四郎	轡田 隆史	倉部 行雄
倉本 宗剛	栗生 將信	栗田 亘	栗山 定幸	黒川 鍾信
古庄 ゆき子	小池 光	小池 英夫	小泉 清	小谷 瑞穂子
小林 和男	小松 浩	児島 宏子	後藤 秀機	今野 耕作
紺野 猷邦				

さ行

佐々木 健一	佐々木 卓	佐々木 満里子	佐田 智子	佐藤 きむ
佐藤 幸子	佐橋 慶女	佐保田 芳訓	斎藤 勇	齋藤 健
齋藤 健次郎	齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子	坂本 弘道
澤口 たまみ	澤地 久枝	澤藤 範次郎	三宮 麻由子	志村 ふくみ
塩谷 靖子	下重 暁子	下村 満子	杉江 弘	杉溪 一言
杉戸 大作	杉山 武子	鈴木 博	砂原 和雄	

た行

田中 トモミ	田中 伸尚	田中 秀一	田中 實	田沼 敦子
田村 秀敏	田谷 麗子	田和 潤子	高井 潔司	高木 徹
高榎 堯	高階 經和	高島 肇久	高橋 祥友	高村 壽一
竹内 一正	竹中 淑子	武本 宏一	谷地 快一	谷村 鯛夢
俵 万智	柘野 健次	辻 由美	堤 未果	鶴ヶ谷 真一
D・ゾペティ	出久根 達郎	ドリアン 助川	戸田 桂太	戸田 淳子
鳥羽 欽一郎	東畑 朝子	当銘 貞夫	徳田 正幸	富永 孝子
富山 和子	鳥海 修			

な行

内藤 啓子	内藤 洋子	中井 幸一	中島 さおり	中野 利子
中名生 正昭	中丸 美繪	中村 登紀夫	中村 政雄	中村 龍介
中山 士朗	永井 梓	長井 好弘	長田 亮一	長友佐 波子
長野 安恒	長屋 龍人	鍋島 高明	並木 きょう子	新妻 義輔
二宮 正之	蜷川 真夫	縫田 曄子	野中 康行	野見山 曉治

は行

葉山 美知子	羽中 田 昌	畑 正憲	畠山 重篤	濱邊 祐一
原 彬久	原田 國男	林 望	樋口 恵子	廣野 眞一
深尾 凱子	福田 章	福田 はるか	福原 義春	藤原 勇彦
藤原 作弥	藤原 房子	藤原 正彦	船木 拓生	降幡 賢一
古川 治次	古川 浩	穂苅 正臣	細川 俊夫	堀尾 眞紀子

ま行

前田 晃伸	牧 久	牧村 健一郎	正籙 聡	又吉 國雄
町田 邦雄	松田 宣子	松原 眞樹	松本 仁一	萬年 浩雄
三島 利徳	水谷 亨	道川 文夫	道脇 弘俊	南 砂
宮本 倫好	宮崎 佳代子	村尾 清一	村松 賢一	望月 照彦
桃井 恒和	森 小夜子	森 孝之	森 武生	森 哲志
森 美可	森永 公紀	森本 貞子	森本 雍子	森脇 逸男

や行

八百板 洋子	八木 美雄	矢吹 清人	安鳴 明	柳生 尚志
柳澤 嘉一郎	柳澤 桂子	柳川 時夫	山川 静夫	山形 孝夫
山岸 健	山口 寿一	山口 仲美	山下 健	山藤 章二
山室 寛之	山本 一生	山本 思外里	よしだ みどり	養老 孟司

横山 昭作 吉岡 純子 吉野源太郎 吉原 賢二 吉行 和子

わ行

和田 亮介 若林 滋 脇 祐三 渡瀬 昌彦 渡辺 様子
渡辺 綱纜 渡辺 雅隆 渡辺美佐子 渡邊 満子

法人会員（順不同）

朝日新聞社	岩波書店
毎日新聞社	講談社
読売新聞社	NHK 出版
産業経済新聞社	KADOKAWA
日本経済新聞社	集英社
中日新聞社	
共同通信社	
日本放送協会	
TBS テレビ	

日本エッセイスト・クラブ事務局



会報 2021 春 (No. 72 | Ⅲ)

2021年4月22日 発行

発行

発行人 遠藤利男

発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋 1—18—2

明宏ビル別館 6階 T105 - 0004

電話 03(3502)7287

$$\begin{array}{r} \text{F} \\ \text{A} \\ \text{X} \end{array} \begin{array}{r} 0 \\ 3 \\ 3 \\ 5 \\ 0 \\ 2 \\ 7 \\ 2 \\ 8 \\ 8 \end{array}$$

http://essayistclub.jp/

Eメール info@essayistclub.jp印刷所
(株)TBSグローディア

古今東西の名著、その核心を読み解く——。大好評の愛蔵版！

NHK「100分de名著」ブックス

定価：本体 各1,000円+税(★は定価：本体1,300円+税) *各四六判 並製

ドラッカー マネジメント	上田惇生
孔子 論語	佐久協
ニーチェ ツァラトゥストラ	西研
福沢諭吉 学問のすゝめ	齋藤孝
アラン 幸福論	合田正人
宮沢賢治 銀河鉄道の夜	ロジャー・パールバス
ブツダ 真理のことは	佐々木閑
マキャベリ 君主論	武田好
兼好法師 徒然草	荻野文子
新渡戸稲造 武士道	山本博文
パスカル パンセ	鹿島茂
鴨長明 方丈記	小林一彦
フランクル 夜と霧	諸富祥彦
サン・テグジュペリ 星の王子さま	水本弘文
般若心経	佐々木閑
アインシュタイン 相対性理論	佐藤勝彦
夏目漱石 こころ	姜尚中
古事記	三浦佑之
松尾芭蕉 おくのほそ道	長谷川 權
世阿弥 風姿花伝	土屋恵一郎

万葉集	佐佐木幸綱
清少納言 枕草子	山口仲美
紫式部 源氏物語	三田村雅子
柳田国男 遠野物語	石井正己
ブツダ 最期のことは	佐々木閑
莊子	玄侑宗久
岡倉天心 茶の本	大久保喬樹
小泉八雲 日本の面影	池田雅之
良寛詩歌集	中野東禪
ルソー エミール	西研
内村鑑三 代表的日本人	若松英輔
アドラー 人生の意味の心理学	岸見一郎
道元 正法眼蔵	ひろさちや
石牟礼道子 苦海浄土	若松英輔
歎異抄	釈 徹宗
ユゴー ノートルダム・ド・パリ	鹿島茂★
サルトル 実存主義とは何か	海老坂 武
カント 永遠平和のために	萱野稔人
ダーウイン 種の起源	長谷川眞理子
アルベール・カミュ ペスト	中条省平

ne
CLUB